

6 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【討議の柱1 知識を相互に関連付けてより深い理解に向かうことができていたか】

- ・本時では、前時までに習得した技を組み合わせたり、発展させたりする児童の姿が見られた。
- ・友達との交流を通して、技の組合せを変えるなど、学び合う姿が見られた。
- ・低学年では、視点を絞ったゴールを提示することで、より学びやすかったのではないか。

【討議の柱2 単元デザインは、児童の「主体的・対話的で深い学びの実現」に結び付いていたか】

- ・児童が、教師が示した単元の見通しや目標を理解し、主体的に取り組む姿が見られた。
- ・前時までの学習内容がICT端末に記録されていたことで、それを基に児童が話し合うなど、深い学びの実現に向かっていた。
- ・掲示物や場の設定が工夫されていて、体育や運動が苦手な児童も、自己の課題の克服に向け、主体的に活動することができていた。

(2) 指導主事の助言

〈旭川市教育委員会 教育指導課 主査 森 走平〉

① 「課題設定・見通し」について

- ・児童一人一人が、目標を理解し、学習への興味・関心を高め、主体的に課題解決に取り組むようにするために、目標を示すだけではなく、児童に「何を学ぶのか」「どのように解決するのか」について理解させることが大切である。
- ・低学年においては、学び方を身に付ける段階であるため、見通しをもたせながら、「運動させる」、「考えさせる」などの場面を丁寧に設定していくことで、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、さらに、思考力・判断力・表現力や自己調整しながら粘り強く学習に取り組む態度を育成することにつなげていく必要がある。

② 「自己決定・自己選択」について

- ・児童が体を動かしたいときに動かし、話し合いたいときに話し合うなど「場の設定」を工夫している様子がみられた。
- ・児童が選択し、活動したこと等について教師が価値付けることにより、主体的な学習につながると考える。
- ・体育が苦手な児童への配慮については、学習指導要領にも記されているため、参考にし苦手意識の軽減や意欲の向上につなげていただきたい。

③ 「単元レベルの振り返り」について

- ・1単位時間で学んだことやICT端末の効果的な活用等について児童に振り返らせることで、自己の課題を把握し、次時の学習に生かすことや次の領域の学習の見通しをもつことにつながる。
- ・単元レベルの振り返りは、児童が、既習事項を活用したり課題解決を図る方法を自ら選択・実践したりしていくために必要不可欠である。

〈上川教育局 教育支援課 義務教育指導班 主任指導主事 蒔田 和樹〉

① 「発問」について

- ・児童の具体的な姿を想定して発問を考える授業づくりは、体育科に限らず全ての教科で大切なことであり、児童生徒を主語に置いたとしても、資質・能力の獲得に向けた教師の働き掛けとして、「発問」は重要なものである。

② 「必要感のある学び合い」について

・子どもを主語にする授業を展開する上でも、教科教育である以上はある程度条件や枠組みを設定することは必要なことであり、その中で子ども自身が選択できるようにするのがよい。

③ 「本時レベルでの振り返り」について

・「振り返り」は、主体的な学びを促す取組の一つとして位置付けられている。振り返りには、「学習活動の意味を考える」「身に付いた資質能力を自覚する」「児童生徒自身が気付きや疑問から新たな課題を生み出し次の学びにつなげる」という作用があり、指導者は意図をもって「振り返り」を位置付けが必要がある。

・振り返りの方法やタイミングを吟味することで、主体的な学びの実現につながっていく。例えば体育科においては、文章表記だけでなく、他者との交流や動画の撮影などが考えられ、いわゆる「『振り返り』のための『振り返り』」とならないよう、振り返りの目的に応じた、より一層の工夫を期待する。